

女教師とのアナルSEX

---

---

## 女教師とのアナルSEX

「強姦・輪姦」

---

---

[提供：NAN-NET](#)

# 女教師とのアナル SEX

女教師とのアナル SEX

女  
教  
師  
と  
の  
ア  
ナ  
ル  
S  
E  
X

しつこく嫌なオヤジだけんど

金の払いはよかつたから少女にとってこの 中年男とは3度めのベットインになる。奴のベンツで郊外のホテルまで 行くのは少女の為でもあった。

彼女の名前は近藤頼子、市内の女子校に通う17才、現役女高生が私服とは言え堂々と街中のホテルに出入りするわけには行かないだろう。

最近オープンしたお洒落を気取ったホテルの駐車場には先客が数台の車を止めていた、真つ昼間からお盛んな方が多い。

少女が手にしたスポーツバックにはセーラ服が納まっている、オヤジのたつての願いで用意したアイテムだ、もちろん洗濯代込みでたっぷりと割り増しを頂く約束に成っている。

部屋を選びオヤジと少女はエレベーターが降りて来るのを待つ、少女はもしも、このエレベーターから知り合いが降りて来たら バツが悪いだろうな、と物思う。

なんと言つてもここはエッチだけが目的のラブホテルだからだ。

そんな事を考えているうちに扉が開き、いままでお楽しみだったであろうカップルが降りて来た、その顔を見て少女は驚き、思わずその場で立ち止まってしまふ。

少女の気配に気付いたのか俯き加減だった相手の女性が顔をあげる、彼女も驚愕の表情を浮かべた。

マズイ、動転した少女は訝る。オヤジをエレベーターに押し込みスイッチを押す、閉まる扉の向こうでは少女を凝視したまま女性が固まっていた。

困った場所ですれちがった女は飯田静子、少女が通う女子高の担任の先生だ。

今年たしか30才になったと聞いたことがある。旦那もどっかでセンセをしているはずだが少女は良くは知らなかった。

活発で年よりも若く見られる静子先生はちょっと厳しいタイプだったが、へんに鼻厘したりしないから生徒からの人気はあるほうだろう。

生活指導も担当していて問題児である少女も何回かよびだされて説教された事がある、押し付けがましくてうざったいとは感じたが、そんなにむかつきはしなかった。旦那の顔は知らないが夫婦でこんなラブホテルに来るかは疑問だ、それにあの態度はぜつたいにおかしい。

ひよっとして不倫？では無ければ些かマズイ事になる。こんな所で顔をあわせるなんて、と少女は困惑していた。

ホントならオヤジに抱かれている場合じゃ無かったが、だからと言って何が出来るわけでも無いから、しょうがなく少女は商売に励むことにした。

翌日案の定、頼子は静子先生から呼び出された、放課後に指導室へ行く。とすでに先生は椅子に腰掛けてまっている。

最初が肝心だ、と少女は考え、とりあえず主導権を取らなければと思い、勢いよく指導室の扉を開け放つ。

「おまたせ、センセ。」

物思いに耽っていた静香先生はひどく驚いた様子で顔を持ち上げ頼子を見つめた。

「あ、近藤さん、あの……。」

「センセ、まずいよあんな所でさあ、いったい相手は誰なのよ？」

扉を閉めてから、挨拶した時とはうって変わって頼子は小声で話しかけた。

「え、あ、それは、言えないの……でも……。」

少女の勘は適中していた、やはりホテルにいたのは旦那ではない無い、もしも亭主だつたら頼子は苦しい事態に陥っていただろう、でも不倫ならばこっちのものだ。

「あそこのホテルは皆っこう使っているんだよ、だめだよ浮気なのにあんな所でしちゃあさ、ばれるよ学校や旦那にさ。」

「え……そんな……でも……。」

「だめだね、手抜きだね。郊外ならば大丈夫って思ったんだろうけれど、  
あ。甘いな。」

優位を確信した私はたみかけた。

「さ、話してセンセ、いつもあそこを使っているの？」

「そんなこと……あの日が初めてよ、信じてちょうだい。」  
完全に形勢逆転していた、やっぱり社会的に地位が有るぶんだけ教師である静子は不利だ。

「私はもう17だから恋愛は自由だし結婚だってOKじゃん、だからこれがばれ  
ても精々退学に成るだけだよ、でもさあ、セン セはまずいよね。旦那を裏切つて  
男とホテルにしけこむなんて、他にしられたら大事だよ、偶然に見たのがアタシ  
で本当によ かつたね、まったく。」

俯いた静子に言葉は無かった、

「ねえ、センセ、どうだった？あの男、良かった？」

「え????」

「だからあ、あの男とのセックスが良かったか聞いているの？」

「そんな！私はあの人とホテルに行ったのは初めてで、それに……」

「んな事聞いてないわよ、男とセックスして良かったかって言ってい  
るの、ねえ  
どんな体位で抱かれたの、何回くらいイッたのかなあ？」

「知りません、そんな事。」

「いいのかなセンセ、ちゃんと答えないと噂が流れちゃうよ、静子セ  
ンセが浮気  
しているってさあ、困るでしょ、そんな話が囁かれたら。」

追い詰められた静子は真つ赤に成り俯くのがつくりと肩を落とした、それから彼女は促されるまま告白を始めた。

静子の話では結婚して4年に成る旦那は名門校の教師で仕事が忙しく補講などで休日も家をあける事も多いそうだ、疲れて帰って来て寝るだけの生活が続いていると言つ。

家庭内での会話も少なく夜の営みに至っては2、3月に1度にまで減っていて、ようやく身体が夫婦生活に馴染んで来た静子は不満な日々を過ごしていた。

そんな彼女の心の隙に付け込んで来たのは2年生のPTAの役員を務める男で、口説き続けられた静子は昨日とつとつ男の口先に乗せられ、あのホテルで身体を開いていた。

「だめだったわ、良く無かったの、あの男、口先だけでね、すぐに、その、出しちゃったの。じぶんでも馬鹿な事をしたと思うわ、あ、あなたに見られたのは天罰ね。今は本当に惨めな気持よ。」

項垂れたまま頭を小さく左右に降つて小さな声で静子が告白を締めくくった。

「そんな事無いよ、センセ、とにかく昨日の事はお互いに黙っていいよ、あなたはまだ退学に成りたくないからセンセのことは誰にも言わない、心配しないでいいよ、共犯者みたいなものだねア、タシ達はさあ、ふふふふ。」

「はあ、本当にそうね、私は教育者としては失格ね、でも主人を尊敬しているし愛しているから離婚なんて考えられない、おねが、い頼子さん絶対に他言無用

「よ。」

「おつけ、これで契約成立ね。じゃあアタシ帰るから、いいでしょ？」

「ええ、かまわないわ、でもお願いよ。」

「まかせておいて、口にチャックするからさ。」

窮地を脱した頼子は意気揚々と指導室を後にした。それが縁で頼子は静子先生と親しく話しをするように成った。最初は頼子があの特徴を黙っているかどうか心配で声を掛けて来た様だったけれど、そのうちに共犯者意識も手伝い、進路の相談からY談までも交わす間に成って行った。

「センセ、旦那忙しいの？」

放課後の校庭の隅のベンチに彼女達は腰掛けていた。「なんで？」

「だって、今日の授業中に真紀と美枝子を怒ったでしょう、なんだかヒステリックだったもの、皆もへんだって噂してたんだ。」

「そう……御免……：：：：：そうなんだ、このところ主人とはろくに話もして、毎晩遅くに帰って来て夕食を取るとすぐに寝てしまうのよ。まったく、何の為に結婚しているのか分からなく成るわ。」

「ふん、じゃあセックスも無し？」

赤裸々な会話だが頼子奔放な物言いに静子も慣れっこになっていて、いちいち顔を

赤らめることは無く成っていた。

「ぜんぜん、指一本触れてこないの、失礼しちゃうわよね。正直に 言ってるイライラしているのよ、またつまらない男に引つ掛からな い様にしないとイケないわね。」

「ホテルさえ選べばOKじゃない、積極的に生きましようよセンス！」

静子先生はだまってかぶりを振りながら寂しそうに微笑んだ。

頼子の目から見ても静子先生は美人だと感じていた、物憂気な風情から大人の女の色気が滲み出ているのに、まったく馬鹿旦那のようだ、静子先生の前では口にしな  
いけれど、頼子は旦那も浮気しているのでは？と想像している。

じゃなきゃこんなに魅力的な女房を放っておくはずが無い。

頼子は密かにひと肌脱ごうと決めていた。夏休みに入ると頼子は何度か静子の自宅に押しかけた、紅茶を御馳走になりながら、それとなく旦那のスケジュールを聞き出し、数日間家を開ける機会を窺った。チャンスはすぐに訪れた、だんなが出張で4日間家を開ける事に成ったのだ。それを聞いた頼子は段取りを整える為に友人達に連絡した。

すでに教師と生徒と言うよりも友達感覚と成っていた彼女等だったから、旦那の留守宅に押しかけて夕食を御馳に成っても静子は怪しいとは思わないだろう。食後

の紅茶を飲みながら静子先生と頼子は他愛も無いおしゃべりに花を咲かせていた。  
ピンポン

「あら、今頃誰かしら？」

「あ、アタシが出るからいいよセンセ。」

「え、でも頼子さん、」

訝るセンセを後にして頼子は玄関にむかいドアの鍵を開けた。

「よう、頼子、来たぜ。」

「まっていたよ悟、何人？」

「6人用意した。それで足りるだろう」

「じゅうぶんじゃ無いか？さあ、入って。」 雪崩れ込んだ若い男達は居間でくつろぐ静子先生に殺到した。

「きやあ！彼方達、なに？なんなの、頼子さん、これはいった

い、何の真似？」

「うふふ、センセ、静かにしないとお隣に聞こえちゃうからねえ。旦那の留守中

に若い男を6人も引っぱり込んだのがばれると体裁 がわるいでしょ。」

「だつて、こんな、いや！やめて、離して、いやよ、服を脱がさな いで、いた、

やめて、頼子さん、助けて、いやああ、そんな ところを触らないで、やめ

てえ！」

屈強6人の男に押さえ込まれた静子はもがくが腕力ではかなうはずも無く、荒々しく衣服を剥ぎ取られて行く。男達は静子の抵抗を楽しみながらついには下着を破り捨て美貌の人妻を全裸に剥いてしまった。

「ひどい、頼子さん、やめさせて、こんなの嫌よ、お願い、助けて。」

「なにを言っているの、センセの無聊を慰める為に集まってもらったんだよ、コイツが悟、アタシの幼馴染なんだ、皆は悟の友達だよ。旦那 那もしばらく出かけているから良い機会じゃない、うんと楽しみまし ようよ。」

「いやよ、手を離して、こんなの、やめて、おねがい、」

全裸に剥かれた静子が股を開いた姿勢でソファに押し付けられている、美貌の教師の哀願に耳を貸さずに頼子は彼女の股間に指を這わせた。

「なんだ、ぜんぜん濡れて無いよ、やる気が無いねセンセ。」

「やめて、紺なの嫌よ、もう帰って、お願い、帰って。」

「だめだめ、だいたい今から帰って言われても悟たちが納得しないもの、じたばたしても無駄だからおとなしく犯られちゃいなさいセンセ。」

頼子は静子先生の股間に顔を埋めて乾いた肉裂に舌を這わせて唾液で湿り気を与えた。たつぷりと唾をまぶしてから顔を上げて悟の方を振り返り手を伸ばした

「持つて来てくれだんでしょ？（コーク）。」

「おう、ほらよ。」

悟から小さな包みを受け取ると、頼子は封を切つて中の白い結晶取り出す。「これ

ねえ、とっても気持の良く成るお薬なんだよセンセ、アタシからのプレゼントなの。」

「やめて、へんなもの塗らないで、ひい……いやよ。」

「変なものじゃ無くて良いのもだよ、すっごく感じるんだから。病み付きになるよ、アタシが保証する。」

指先の結晶は頼子が塗り付けた唾液に溶けて静子の粘膜にへばりつき、やがて吸収されてゆく。とくにクリトリスには入念に刷り込んでいた。この薬のおかげで静子は狂乱の一夜を経験する事に成りそうだ。整えられた恥毛をかき分け、綻びかけている肉壁にともしれば埋もれるがちのクリトリスを指先に捉えて薬を塗り込む。美しい女教師の表情を窺えば、羞恥に頬を染める成熟した女性の色っぼさが滲み出ている。

「ああ、もうやめて、はずかしい、」

異常な状況での愛撫に混乱しながらも静子のそこは、ほのかに潤いはじめていた。

「こんなに早く濡れ始めるなんて、センセひよっとしてマゾ？」

「いやあ、そんな事を言わないで……やめてええ……」

「だつてクリちゃんもこんなに立っているよ、ほら、ほら、」

「ひいひい……いや……なぶらないで……ああ……」

充血してポツチリと勃起したクリトリスを嬲られる美貌の人妻教師は、あられもない泣き声を上げて身悶えるが四肢を少年達に押さえられて、それ以上の抗う行動はできなかつた。

「ヒイイ……ヒイ……あ……もう……堪忍……あ、あ」

頼子が指を押し付けてグイグイと捏ねてみせると女教師は悲鳴を漏らしながら何度も総身を震わせ、よがり声をもらしてしまう。

「クリちゃんを弄られて気持がイイのでしょうか？ 静子センセ、ほらその証 拠にい やらしいお汁が漏れてきているよ。」

頼子の言葉でのいたぶりに静子は恥ずかしげに頭を振ってみせるが、指嬲りが続く中で美貌の人妻は仰け反り悲鳴を上げ続けるしか手立ては無かつた。塗り込んで上げたクスリは劇的な作用を見せて彼女を追い詰めて行く。

「ねえ、センセ、そろそろ入れて欲しいんじゃない？」

「いや……それだけは許して、お願い、ダメよ。」

「なんで？ 欲求不満の人妻じゃないの、無理は身体に毒なんだから。さあ、悟、犯つちやつてちょうだい。」

熟れた肢体をさらし悶える美貌の人妻を目の当たりにした少年達も興奮をおさえていない、頼子さら指名された悟はこのグループのボス的な存在であり一番手の権利

を有していたのであろう、すでにズボンを脱ぎさりいきり立つ肉棒を露にしていた。「すげえ美人だなあ、先生しているんだって？こりゃあ犯りがいがあるよな。」  
頼子に代わり部下達が押さえる哀れな女教師の正面に立った悟は両手を伸ばして白く柔らかそうな乳房を掴み、こね回す。

「やめて……いやああ……やめてください……後生です……あああそんな……しないで、……おねがい……ひい……」

薬が効き始めたのか、頼子が驚く程に静子は激しく身悶える、平素のしとやかさはどこにも見当たらない。

悦楽に溺れかけている女教師の淫らな仕草に興奮した悟は無理矢理に開かれた股の付け根で淫ら汁を噴き零している花裂に勃起した肉棒を押し付けると一気に埋め込んだ。

「ひいひいひいひい！……だめ……だめ……だめ……ぬいて……おねがい……しないで、……だめなのお！！……ぬいてえ……」

言葉とは裏腹に静子の蜜壺は悟の強ばりを易々と呑み込んで行く、クリトリスに塗り込められた薬の効果も手伝い秘肉は熱く滾り蕩げんばかりだ、その柔肉が悟の肉棒にまとわりつきゆっくりと締め上げて来る。「こりゃあ、すげえ、なんて締めま  
りがいいんだ、あんだ、本当に人妻かい？

まるで新品だけ、あなたのおんこは！、うわあ、そんなに絞めるなよ、はははははは……」

打ち込まれたシヨックで呆然としている人妻の唇を悟は難なく奪い舐め回した。その舌先は唇から顎を伝い、やがて首筋や耳たぶにまで達して行く。そして一段落すると、今度は腰を揺すり責め始めた。

「ひいひい……いやあ……だめ……ああ……そんな……ひいひい……」 惚けた表情のまま静子は顔を左右に振りよがり泣く、しかし恐ろしい程の悦楽に囚われた哀れな女教師は腰をもたげて呑み込んだものを味わうようにうねらせていた。

「ねえ、センセ、悟は上手いでしょ？ けっこうテクニシャンなんだよ。」  
 「ああ……そんな事……聞かないで……もう……私……ああ……」

年下の少年にいいように小突き回されながら静子は甘えのこもった泣き声を漏らす。荒々しい胸への愛撫さえ堪らない程に心地よい。灼熱した肉裂をなだめるように挿入された肉棒は静子に恐ろしい程の快感を味わわせてくれた。

「ほら、先生、いいんだろ、こんなに絡み付いているぜ、そら、そら」 悟の突き上げについに静子も合わせて腰を蠢かせてしまふ。

「ああああ……いい……いいです……すごい……こんな……ああ、頼子さん…… 笑わないで……もう静子は……だめになる、あ、ひい、あ、あ……！」

「笑わないよ、センセ、悟に犯られたら皆そつなっちゃうんだよ。」

静子は最初の抗いが嘘の様に積極的に腰を使い始める。くわえこんだ肉棒を離すの



「起きなよセンセ、一人でダウンしてどうするの？まだ五人残っているのよ、ほら、起きて。」

頼子に揺さぶられて静子は一時の失神から目を覚ました。「目を覚ましたねセンセ、どう良かったでしょう？でもさ、まだ疼ているよね、おんこがさあ、一回くらいで治まるわけが無いんだよね、あの薬。」

恥ずかしいが言われた通りだ、静子は目を覚ますと同じに強烈なうずきを感じていた、もしも人目が無ければ自慰に耽るであろう峻烈な感覚だった。

「もう甘やかしてあげないよセンセ、さあ、こんどは自分で犯るんだからね。」すでに静子をpushさえる手は無く、彼女は裸身をさらしたままソファに座っている。そして目の前の床には下半身をむき出しにした少年が一人仰向けに横たわっていた。

「ほら、センセ、隼人君がお待ちかねだよ。センセのほうから犯ってあげないと6人掛かりで無理矢理されたらおんこが壊れちゃうから、さあ、早く、そうしないとセンセのうずきも治まらないんだから。」

言われるまでも無く静子の股間は気が狂いそうに疼いている、悟の精液はまるで欲望の炎に油を注いだように思えた。この昂りをおさえる術など思い付かない、いまはただ男が欲しかった。強い男に貫いてほしかった。ふらふらとソファから立ち上

がった女教師は横たわる少年にいきなり跨がろうとした所を頼子に押しとどめられた。

「だめだよセンセ、いきなりじゃ失礼でしいよ、隼人君の手 ポに御挨拶してか  
ら！」

虚ろな視線を彷徨わせ、静子は途方にくれた様子だった。その仕草がた ならなく色  
つぱく見学している少年達は股間を膨らませ頼子の言葉を待った。

「さあ、センセ、お口で御挨拶よハメるのはそれから、まったく嫌らし いんだか  
ら、うふふふふ。」

静子は納得した様に頷き今度は横たわる隼人の股間に顔を近付けて

「ねえ、ハヤトくん、お願い、静子に手 ポをくわえさせてちょうだい 、いいで  
しょ？」

「あ、ああ、良いよ……先生……その……口でしてくれよ。」

美貌の女教師に上目使いでねだられた隼人は大きな音を立てて唾を呑み込み許しを  
与えた。

「うふふ、うれしいわハヤトくん、静子は精一杯フェラチオさせていた だきます。」  
股間のうずきが静子の理性を打ち砕いていた、美貌の女教師はいま欲情 に溺れた牝  
の本能に忠実に行動している。すでに露になっっている隼人の 肉棒の付け根を持って

から、堪らない風情で先走りが溢れ出ている先端を舐め回した。

「おおお、すげえ……………先生……………すごいぜ。」

悟に比べて経験が浅い隼人はそれだけで声をあげて感激していた。

「いや、先生なんて呼ばないで、こんな事をしている最中にそんな風には、とても辛いのだ。」

「でも、先生は先生だろう、それとも淫売とでも呼ばれたのか？」 傍で見ながら  
「まぜかえす悟を静子は恨めしそうに見上げた。」

「ええ、そうよね、その通りだわ、私は淫婦よ、自宅に彼方達を招き入れて、自分でこんな事をするのですもの、でも我慢出来ない！」

静子は手を離し立ち上がると再び隼人を跨ぐ、今度は頼子も邪魔はしない。ひざまづいた静子は絨毛の奥で疼き彼女を悩ませる肉裂を隼人のいきり立つ肉棒の先端に押し当てて、ずれない様に少年の強ばりに手を添えながら、少しずつ腰を落として呑み込んで行った。

「ああああ……………きもちいい……………いいのおお……………」

頼子は少年を貪る静子の脇に立ち

「ねえ、センス、どこがいいのかなあ？正直に言わないと、もう止めさせちゃうよ。」

「ああ、頼子さん、恥ずかしい、私にそんな事を言わせたいの？」

「皆もセンセの口から聞きたがっているとおもふなあ、どう？」

淫らな女教師の淫行を固唾を飲んで見守っていた少年達が一同に頭を縦に振り賛意をしめした。

「わかつたわ、言います、静子のおそこにハヤトくんのおれが入っていて、それで気持が良いんです！」

「だめだめ、こう言いなさい。」

頼子が女教師に何事が耳打ちした。

「あああ、そんなに私を辱めたいの？」

「いやならこれで終わりよセンセ。」

「ひどい、言います、静子はセックスが大好きな淫乱教師です、おんにチポを入れてもらって幸せです。皆で静子を黽つてください……ああ……

恥ずかしい………」

自分の言葉に昂つたのか静子は更に腰をうごめかせ始めた、ゆっくりと腰を上下させ、合間を見ては今度は横方向にも動きを加える。

「うおお、先生、すごいよ。」

頭をもたげた隼人の目に交わる股間が飛び込んで来た、織毛の奥にパツクリと口を

ひらいた淫唇が己の肉棒を包み込み、腰の動きに合わせて姿を現す肉柱は淫らな汁で又ル又ルに濡れていた。

「あああ……いい、……すごく……いいの……ひい……あ、ああ……」

大きくのけぞり時折身体を震わせ泣き声をあげる女教師は、それでも迫りくる悦楽に追い立てられ腰を振るのを止められないでいる。

「ああ、ひい……ハヤトくん……おねがい……動いて……私だけじゃ……だめなの、」

恥知らずな願いを聞き隼人はボスの悟の顔色を窺うが、なぜか悟は OK しない。

「ねえ……ハヤトくん……おねがいよ……突き上げて……もう……私、 狂いそうなの……焦らさないで、おねがいよ。」

あられもない女教師の哀願に悟と頼子が何事か目配せしてお互いに 邪悪な微笑を浮かべた。そして頼子が悶え無く女教師の背後に回り込む。

そして頼子は先程悟からうけとった媚薬の残りを指先に取り、哀れな静子の裏門をまさぐり始めた。

「きやあ……なに？……何をしているの？うあ……やめて……そんなところ……

汚い……いじらないで……いやよ……いやああ。」

生まれて初めて他人に排泄器官をまさぐられた静子が欲情に惚けた表情で抗いの言葉を口にしていた。

「センセ、ここは処女？」

「なに、なんのことなの、ああ、頼子さん……さわらないで……おしりよ……  
いやああ……そんな所に……指を入れないで……恥ずかしいのやめて……！」

「だからお尻は処女か？って聞いているの、アナルセックスの経験は 無いの？」

「ありません、ひいひいひい、おしりで、セックスするなんて……そんなの、  
変態よお……いやああ……指を抜いて……お願い……ああああ……！」

最後の悲鳴は困惑からのものだった、汚らしい排泄器官への暴虐的な行為は苦痛意外に何も無いとおもっていた静子だが、きゆうに焼ける様な感触が襲い掛かって来たのだ。

「いやあ、やめて、もう、いや、そんなの、いやあよおおお……ひい。」

指を差し入れられた肛門から、とても我慢出来ないうずきが沸き起こり背中を駆け抜けた。排泄器官の奇妙で如何わしい感覚は静子を翻弄しはじめていた。

「やったね、悟、ラッキーじゃん、静子センセったらこっちは処女だった。」

すぐ脇ではしゃぐ頼子の声がひどく遠くに聞こえている。肛門から沸き上がるわけの分からない感覚が静子を少しずつ壊して行く。直腸の中を頼子の指が動いて出入りをくり返す度に妖しい感触が生み出され静子を 困惑させて行った。

「そうかい静子先生は処女尻かい？それなら俺がいたただきたいところだ けれど順番があるからな、それに哲也なら適任だ。何と言ってもアナ ルスナイパーだからな。」

少年達に笑い声が広がる、哲也と呼ばれた少年は自他ともに認めるアナル好きで、以前他の女を輪姦したときにも哲也はアナル以外には興味をしめしていなかった。

「さあ、センセ、哲也くんが用意出来たってさ、今日からセンセも変態 の仲間入りによ。」

頼子が哲也に場所を明け渡す。

「いやあ……いや、いや、いや……触らないで……変態……そんな 浅ましい真似はしないで……おねがい……あ、あ、いい……はあ、は あ、はあ……あ ああ」

慌てて逃げようと身を起した静子だったが、その時分から合図された隼人が下から猛烈に突き上げ始め、女教師はたちまち悦楽の荒波に揉まれ沈没してしまう。

「あ、あひい……おねがい……ゆるして……お んこで……お ん こで、ご奉仕しますから、お尻なんて、いやあああああ。」

予想だにしなかった暴虐に曝され美貌の女教師のくちから、憚られるような4文字の言葉が連呼されるが、哲也は隼人の肉柱を呑み込んだ陰裂の上でひっそりと口を窄めているセピア色の排泄穴を凝視していた。もつとも口をすぼめてはいるものの腸壁に塗り込まれた媚薬は確実に静子の脳髓を 焼き焦がしている。

「きれいな尻だ、こんな尻を犯れるなんて、夢みたいだよ。」  
「ゆるして…おしりは、いや…まえて…おんこで…してええー！」  
奴隷と化した女教師の訴えは無視され、哲也は用意して来たローションを、まずは自分の肉棒に擦り付け、そして媚薬のせいで熱く煮えたぎる静子の肛門にもたっぷり塗っていった。

「あらローションなんて持って来たんだ、用意が いい のね 哲也 君。」

静子の冷やかす声に照れた哲也は

「こうしないと、裂けちゃうからね、血だらけのアナルもい い けれど、今日は俺だけじゃあないからな。後を考えればこの方がいいだろう？」

尻の穴にローションを塗られている最中にも静子は下からの突き上げにより無き、逃げることは出来ないでいた。

「おい、隼人、ちよつとの間止まってくれよ。」

「OK、わかった、いれるのか？」

ようやく突き上げがおさまり一息ついた静子の耳に少年達の声がかきこえてはいるが、あまりの悦楽に下半身が痺れてしまい、もう逃げる気力さえ奪われていた。

「なあ、先生、初めてだろう、おもいつきり力を抜きなよな、さもないと 裂けるぜ。」

「お願い、しないで、お尻は、いやよお……」

「がたがた言わずにケツの穴の力を抜きな、そら入れるからな。」

「ああああ、くうう……きやああああ……いたい……やめて……おねがい……い

たいの、……いやああ……ゆるして……頼子おお……たすけて……えええ!!」

裏門からの進入は激しい痛みを伴い、静子は倒れかかり跨がったままの隼人に身を預け抱きついた。剛直がじりじりと押し入って来る感触はおぞましく、激しい苦痛の中で静子はただ泣き声をあげる他に手立てが無い。

「ああ、くるしい……いたいの……ぬいて……もう……いや……」

「ほら先生……もう少しだよ……あとチョットで全部収まるからさ……」  
我慢しな

「いやあ……きもちわるい……たすけてえ……いやああ」まるで息が出来ないみたいに女教師が口を開き酸素を貪っている、切れ長の瞳はつり上がり涙が頬を伝わり落ちる。排泄器官を埋められた嫌悪感から静子の心が崩れ始めていた。

「ほら、全部はいったよ先生、凄く締めつけてくるな、おい隼人そっちはどう  
がいて？」

「最高だね哲也がケツにぶち込んだ瞬間から凄く締め付けだよ、お汁もだ  
流れっぱなしで、俺の下半身はベトベトさ。」

「さて、それじゃ少し動くかな。」  
じつくりと初物を味わった哲也が腰を動かし始める。

「ひい……だめ……うごかさないで……ああ……」

じつと顔を伏せて耐えていた静子は哲也の動きに敏感に反応を示した。

「どうセンセ初体験の感想は、たっぷりとお尻の楽しみを味わってね。」

静子はゆつくりと頭を上げて虚ろな瞳を頼子に向けた。

「ああ、頼子さん……あたし……へんなの……おしり……いっぱなの……よ

……痛いのも……でも何か……へんなの……こんなの……いやよ……ああ……」

「でしよう？お尻だつて慣れれば良いんだから。」

「ああ、はずかしい……でも……なに……これ……あ、ひいひい……そんなに……あ

あ……2本で……ああ、お腹であばれるの……2本が……ひいひい……いいいい……」

あとは哲也たちの成すがままだった、静子は陰裂に隼人を呑み込んだまま処女尻を哲也に捧げ、挟られるままに無き喚き淫らな汁を噴き零していった。肛門はいつぱいにひろげられ鈍い痛みもあるが、それを上回る快感が女教師を狂乱させる。

「ああ……すごい……こんなの……しらない……おんこが……ぬれるうう……あしりがいいのお……おしりよ……なんで……あああ……たまらない、……もつとおお……」

得体の知れない、それでいて恐ろしい程に甘美な感触が2本の肉棒から与えられる現実を静子は思い知らされた。

「くるいそうよ……もう……だめ……ひいいい」 「大分馴染んできましたね、先生。」

「おねがい……ゆるして……こんなに、されたら……気が狂ってしまう……もう……許して……あ……ひいいい！」

そう言いながら静子は2人の凌辱者に合わせて腰を蠢かしている。少年達も余裕がなくなってきた、哲也が揺り動かすごとに静子のアナルは痙攣するような動きを見せるし、アナルの締め付けに合わせて前で呑み込む隼人の肉柱にも秘肉がまとわりつき妖しく蠢いているのだ。

「うっう、うあああああ……もう……だめ……いきそうなの……あひ……いいい……」

静子の身悶えが一段と激しさを増して来た、媚薬に煽られた女教師は始めてのサンドイツセックスでこれまでに無い絶頂への階段を駆け上がって行く。もう張り裂ける様な痛みは感じられない、何もかもが混ざり合い大きな悦楽のうねりの中で揉みくちやに成ってしまった。

「おおお、こりゃあ……先生……なんて尻だ……いいぞ……それ……もっ……と絞めて見せる。それ……」

アナルの支配者である哲也に命令されて哀れな奴隷教師は懸命に括約筋を絞めつけ



発情した人妻教師は求められるままに何度も白濁した子種を子宮や直腸に受け入れ、そのつど随喜の涙を流していた。体力の限界を通り越し、もはや悲鳴すら上げられず、咽からは空気が漏れる音が微かに聞こえるように成るまで犯された、ズタボロのように苛まれながらも静子は歡喜の表情を浮かべたまま股を開き呑み込んでいる肉棒を締め上げ続けた。

ありあまる精力をもつ少年達の凌辱行為はその後1昼夜に及び、哀れな女教師は魂にまで被虐の悦楽を彫り込まれてしまった。夏休み中だった事もあり、結局静子は夫が出帳から戻る前日まで寝込んでしまっていた。

タクシーが止まると静子は料金を払い車を降りる、目の前の豪華なマンションを見上げて一つちいさな溜め息をついた。

部屋の番号は記憶しているから慣れた手付きでインターホンの番号を押すと、返事と同時に正面玄関のオートロックが開いた。

この豪華な悟の住むマンションは、いくら不動産が安く成ったとは言え、億をこえる物件であろう。悟の両親は会社の都合で現在は海外で暮らしていると聞く、いま、

この豪華なマンションの1室を高校生の悟が1人で使っているそうだ。

エレベーターを待つ間、少年たちの情婦に成り果てた自分を振り返って見る。押しかけられて髑り物にされたあの日から、もう1月近くが過ぎていた。

学校が休みだったことも有り、夫の外出する日には決まって呼び出され悟の部屋で  
鬨り者にされていた。

未成年相手の淫行が露見したならば教職は諦めなければ成らなく成る、これは浮気  
ではなく、脅されてしかたなく身体を差し出していたのだ。

静子はそう自分に言い聞かせて、このマンションへの招待を受け入れて来た。

そして自分の身体を求め、そして心行くまで貪られる事に喜びを感じながら、少年  
たちと淫らな行為に溺れて行った。静子が自分を騙せなく成ったのは、皮肉な事に  
夫とのセックスだった。

このところの少年達との交わりが静子のフェロモンを引き出したのであるうか？

ある晩夫が挑んで来たのだ。愛する夫は静子を貫き緩慢にゆすり立て、自分勝手に  
放出して離れてしまった。

かつてはあれ程に胸を焦がした行為も、峻烈な経験をくり返した今の自分には呆気  
無く信じられない程に淡泊な肉の交わりに思えた。

無論そんな事を臆にでも出せば少年達との淫行が露見する恐れが有る、だから夫と  
の交わりの時に静子はそれらしく振るまい満足したような芝居をしていた。

しかし行為を終えて背中を向けた夫が寝息を立て始めると、静子はベットを抜け出  
してトイレに入り、自慰を行ない火照った身体を慰めたのだった。

夫との肉の交わりでは喜びを得られないと自覚した彼女は、翌日口実を設けて外出  
した、そして初めて自ら望んで悟のマンションを訪れていた。

数えればこのマンションに来るのは7回目に成る、その都度やりたい盛りりの少年達に徹底的に貪られボロボロに成るまで犯されていた。

しかし今日は違う、今までは露見を恐れての呼び出しに応じる形であったのが、今日は明らかに自ら望んでここに来ていた。

羞恥に頬を熱くしながら静子は部屋に招き入れられた。

「自分から来るとは、感心だね先生。」

「恥ずかしいわ、笑わないでね。」

「笑うものかよ、おれたち好みの淫乱女教師に成ってくれたんだからな。」

悟に抱かれて貪る様に唇を吸われると、それだけで静子は膝から力が抜けて、腰が砕けそうに成る。

「今日は先客がいるんだぜ、先生。」

デーブキスから解放されて荒い呼吸をくり返す静子の耳に意外な言葉が飛び込んで来た

「先客って？誰？」

「まあ、自分で見て御覧、ほらこつちだよ。」

奥に通じる扉を開くと、目の眩む様な光景が明らかにされる。そこには裸で横たわる教え子のすがたがあった。美しく張りのある若い肌には幾つものキスマークが浮

き上がり、顔にもからだの至る所にもザーメンが飛び散った形跡が露だ。おそらく室内に陣取る5人の少年と悟に凌辱されたのであろう。

「頼子さん……」

教え子の無惨な姿に女教師は言葉を無くしていた。すると悟が近付き

「誤解すんなよな、先生、おれたちは無理矢理に犯したわけじゃ無いんだぜ。頼子は幼馴染みだから俺は気が進まなかったけれど、アイツのほうからマワシてくれて言い出したんだよ。なあ、頼子、そうだろう？」

悟の問いかけに頼子はけだる気にこちらを振り向き、驚く程に妖艶な微笑みを浮かべた。

「ああ……センセ…来たんだ……そうだよ、頼子も、センセみたいにして欲しくて悟に頼んでマワしてもらったの、輪姦って最高、あたしのお尻も、センセみたいにチンポを呑み込んだんだよ、哲ちゃんも誉めてくれたんだ……ケツマ、コも良い具合だって……すごいね……お尻でのセックス……も……う……病みつきに成るよねえ……」

「頼子さん……あなた……」

「だって犯られているセンセすっごく綺麗だったんだもん、皆にマワされているセンセはとっても気持ちよさそうだったから、頼子我慢出来なくて悟にねだった

の…みんなで犯ってっね…でも、お尻も最初はつらか  
ったけれど…途中から良く成った…こんなセックスってあるんだね。」

頼子の告白を聞きながら静子は股間の潤いを覚えていた、自分と同様に複数の男との交わりの妖しい悦楽に溺れてしまった教え子に軽い嫉妬を感じながら、女教師はこの甘美な乱交に混じる為に服を脱ぎはじめていた。

## 女教師とのアナル SEX

# 女教師とのアナルSEX

二〇〇八年三月三十一日 投稿

掲載元 官能小説セレクション

(URL: <http://www.kannou.cc/>)

提供 NAN・NET

(URL: <http://www.nantv.com/index1.htm>)

投稿された文章の著作権は、全てNAN・NETに帰属します。当サイト内の文章、音声等の情報の無断転載、無断引用は禁止です。情報の転載、引用、掲載、取材等をご希望の場合は、必ずご一報ください。上記の要望に対し当社が問題が無いと判断した場合、他メディアにおいて、投稿された情報が掲載等される場合があります。

